

# 英学史の研究

竹中龍範

## (1) 学会・学界の動向

本年 2015 年は、斎藤秀三郎の『熟語本位 英和中辞典』が大正 4 (1915) 年に刊行されてからちょうど 100 周年に当る。この辞書について存外知られることのない情報を披露したい。その初版が 2 分冊であったこと、また、合冊版も COD 初版 (1911) を思わせる赤橙色であったことは知られるところであるが、その版権が日英社から岩波書店に移譲され、昭和 8 (1933) 年にその初版が出た時には紺色の軟装上製本となり、昭和 11 年の豊田實による増補新版においてもやはり同様であった。これは、COD が 1929 年に第 2 版となり、且つその装幀をいわゆる Oxford blue に改めたことを踏まえてのことだったろうか、或いは、版権委譲を受けてアイデンティティーを示すためのものであったのか、恐らく当時であっても公表されることのない情報であったろう。それにしても、その日英社版初版が大正 4 年 7 月 20 日の発行で、5 日後の 7 月 25 日には 15 刷を出しており、時の英学界にいかん歓迎されたかが窺い知られる。

さて、当年度 (2014 年 4 月～2015 年 3 月) も学会・学界の動きから見ておきたい。

日本英語教育史学会の第 30 回全国大会 (東京大会) は、5 月 17 日 (土)・18 日 (日) に拓殖大学を会場に開催された。初日は、新会長江利川春雄による記念講演「日本英語教育史研究の歩みと展望」に続いて研究発表 2 本を聴き、翌日は平賀優子「素読の歴史の変遷に関する一考察」など 8 本の研究発表を聴いた。この 5 月の全国大会開催を除く毎奇数月開催の第 248～252 回研究例会では計 5 本の研究発表ほかが行われ、2015 年 1 月の第 251 回記念例会では、会長、事務局長、評議員経験者 4 名による記念シンポジウム「日本英語教育史学会 30 周年記念：『回顧と今後への期待』」が持たれた。また、2015 年 3 月研究例会では新規企画「英語教育史入門セミナー」の第 1 回として江利川春雄「小学校英語教育は戦前から行われていた」の講話があった。

日本英学史学会の第 51 回全国大会は、10 月 18 日 (土)～20 日 (月) に福井大学を会場に開催された。越前福井の英学史と言え W. E. グリフィスに繋がるが、初日の総会に続く記念講演では成城大学教授牧野陽子の「グリフィスとハーン——日本体験をめぐって」と東京大学名誉教授平川祐弘による「ラフカディオ・ハーンの英語授業——黒板勝美のノートから」の 2 本を聴いた (布施田哲也「日本英学史学会全国大会記念講演について」『へるん』No. 52 (2015.6) 参照)。2 日目は 16 本の研究発表が行われたが、うち山下英一「グリフィスと三国港」など 3 本がグリフィス関係のものであ

## 回顧と展望

た。グリフィス研究の第一人者である山下は本大会会長を務め、同氏のグリフィス関係論文を集成した『グリフィス関連の論文合本』（私家版、2014年7月）が参加者に呈された。20日（月）には、越前洋学のもう一つの牙城であった大野への見学が生まれ、大野高校所蔵の旧藩蔵貴重洋書の展覧などが行われた。同学会の本部例会は、5月を年度第1回として、第488～493回例会が開催され、石原千里「諸厄利亜興学小笠と諸厄利亜語林大成の底本をめぐって」など6本の研究発表が行われた。

同学会各支部では、まず、東日本支部が第19回支部大会を2015年3月26日（木）、自由学園を会場に開催した。同学園明日館の館長による特別講演を聴き、斉藤晴恵「小泉八雲とキーツ研究」などの研究発表が行われた。北陸支部は、支部が一丸となって第51回全国大会福井大会開催に取り組み、大会を盛会裡に終えた。関西支部では、2014年6月7日（土）、第50回となる記念支部大会を兵庫県立大学を会場に開催し、北垣宗治による特別講演「関西支部と重久篤太郎」のほか、石井容子「再来日時 of ジェインズに関する風聞」など研究発表4本を聴いた。また、第23回研究大会は、2014年8月30日（土）、同志社大学にて開催、堀江義隆「最新刊『新渡戸稲造事典』（教文館）に触れて」など研究発表3本を聴いた。中国・四国支部の当年度第1回研究例会は、サテライトキャンパスひろしまを会場に2014年5月24日（土）に開催され、シンポジウム「英学史研究とこれからの英語教育」が行われた。鉄森令子による問題提起「中学校・高等学校の教育現場から」を受けて、隈慶秀「教室での実践史にヒントを求め」など3件の提案がなされ、全体討議へと展開した。第2回研究例会は12月13日（土）に香川大学を会場に、田村道美「漱石とThe Lotus Library (4) — *The Nabob* の書き込みを中心に」ほか1本の研究発表を聴いた。九州支部の第37回研究発表大会は、2014年6月21日（土）、熊本の崇城大学にて開催され、西川盛雄「薩摩辞書の構造」など7本の研究発表を聴いている。

学会賞について、まず、日本英語教育史学会賞は当該年度について該当者はなかった。日本英学史学会のほうは、田井玲子が次節に紹介する『外国人居留地と神戸』（2013年）によって豊田賞を授与された。

英学史関係の施設、企画等については、まず、2014年7月、鹿児島県いちき串木野市に薩摩藩英国留学生記念館が開館した。薩摩藩英国留学生19名が1865年4月に英国に向けてこの地を発ってから150年になるのを前に、その功績を後世に伝えるために設けられたものである。また、11月には、東京外国語大学の前身東京外国語学校の基礎を築いた浅田栄次の没後100周年を記念して、徳山英学会主催により山口県周南市立中央図書館を会場に記念式典ならびに記念シンポジウムが開催された。

また、近年ヘボン関連の著作や企画が続いているが、NHKラジオ第2放送「NHKカルチャーラジオ 歴史再発見」シリーズの2014年10～12月期分として大西晴樹による「ヘボンさんと日本の開化」が電波に乗った。テキストは2014年10月に発行さ

れているが、演者・著者は、明治学院大学長、明治学院長を歴任した本テーマの最適任者である。最新の研究成果を交えながら、「ヘボンの栄光のみならず、人間としての苦悩をも包み隠さず紹介」との視点から、J. C. Hepburn の生涯を語っている。

当年度中の物故者として、2014年5月10日、『日本英学物語』(1937)を著した定宗數松の長男で、日本英学史学会広島支部(現、中国・四国支部)の初代支部長を務め、その基礎を築いた定宗一宏が逝去した。

## (2) 単行本

まず、昨年度分に遺漏の著書3点を補っておく。今西佑子『ラナルド・マクドナルド』(文芸社、2013年6月)は、副題が「鎖国下の日本に密入国し、日本で最初の英語教師となったアメリカ人の物語」と長いが、それが示すように Ranald MacDonald の生涯を読み物としてまとめたものである。近年の研究成果を踏まえてはいるが、参考文献に長谷川誠一の研究が漏れているのはいかかか。日本英学史学会豊田賞受賞につながった田井玲子『外国人居留地と神戸——神戸開港150年によせて』(神戸新聞総合出版センター、2013年11月)は、「国際交流先駆の地としての神戸のあゆみと特色を、開港当時にさかのぼって紹介するもので」(「はじめに」)、外国人居留地の歴史や景観、日本人と外国人との交流など、広汎な領域にわたるテーマの下に、豊富な写真資料・図版の掲出もあって、読ませるものとなっている。寺沢拓哉『「なんで英語やるの?」の戦後史——《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程』(研究社、2014年2月)の内容は、「本書が取り扱う問いをもう少し正確に言うと、『なんで全員が英語やるようになったの?』です。いま、みなさんのまわりには、(中略)英語を一度も学んだことがないような人はいないと思います。こうした状況がどうして生まれたのかということ論じたのが本書です」との言に表されている。戦後の英語教育必修化への道程を社会的に分析したものである。

平川祐弘編『ラフカディオ・ハーンの英語クラス《黒板勝美のノートから》』(弦書房、2014年10月)は、アラン・ローゼン/西川盛雄『ラフカディオ・ハーンの英作文教育』(弦書房、2011年4月)、富山大学附属図書館ヘルン文庫/平川祐弘監修『ラフカディオ・ハーンの英語教育《友枝高彦・高田力・中土義敬のノートから》』(弦書房、2013年3月)に続き、教え子が残したノートを翻字、分析してハーンの英語教育の実像を描いている。中濱京『ジョン万次郎——日米両国の友好の原点』(富山房インターナショナル、2014年10月)は、中濱家に伝わる資料を基に、万次郎の果たした役割を日英両語の読み物にまとめている。また、本年鑑2014年版に紹介したイザベラ・バード『完訳 日本奥地紀行1~4』(平凡社、2012~2013)の訳者金坂清則が『イザベラ・バードと日本の旅』(平凡社、2014年10月)を著し、この類稀なる女性紀行文作家の生涯を描き、開国間もない日本にあって外国人の旅行が厳しく制限されていた時代に

## 回顧と展望

一体何が彼女に日本各地への旅行を可能ならしめたかを探っている。

藤井哲編著『福原麟太郎著作目録』（九州大学出版会、2014年12月）は、「活字化された彼〔福原〕の文章を網羅的に記述することを第一の方針にして」（「はじめに」）、福原の旧制中学時代の書き物から始め、その歿後の福原関係著書、論文に至るまで、福原の業績を文字通り細大漏らさず拾い上げた労作で、福原の略年譜を兼ねる。

川嶋正士『「5文型」論考——Parallel Grammar Series, Part IIの検証』（朝日出版社、2015年2月）は、日本人にはなじみの5文型の淵源を、Onionsからさらに遡って追求し、細江逸記によるわが国英語教育界への導入をその功罪にわたって分析する。

なお、英語辞書史の方面で業績を重ねていた早川勇が、健康上の理由で日本英学会史学会を退会する旨をその会報に宣し、この機に『英語辞書と格闘した日本人』（2014年8月）、『学習英和辞典のこれから——辞書史から学ぶ』（2015年3月）など5冊の著書をいずれもテクネ社からまとめて刊行した。わが国の英語辞書史研究の進展に果たした氏の貢献は大きく、多としたい。

蘭学史関係では、古西義磨『緒方郁蔵伝——幕末蘭学者の生涯』（思文閣出版、2014年10月）が生誕200周年となる緒方郁蔵について、適塾に学んで緒方洪庵の義弟となり、独笑軒塾を開塾し、さらに大阪府医学校等に教えたその生涯を綴っている。広瀬隆『文明開化は長崎から』上下（集英社、2014年11月）は、開国維新によって西歐文明への窓口の座を奪われた長崎こそ明治の文明開化を動かした原動力になったと分析する。片桐一男『知の開拓者 杉田玄白——「蘭学事始」とその時代』（勉誠出版、2015年1月）は、2015年が『蘭学事始』成稿200周年となるのを機に、玄白の『蘭学事始』を読み解き、史実を重ねて江戸蘭学創始のころの景を叙している。

一方、日本語学、翻訳論に係る英学史関係のものとして、松尾義之『日本語の科学が世界を変える』（筑摩書房、2015年1月）は、開国前後から取り入れた西歐文明の精髓を、洋学者、科学者が漢語に訳して日本語の中に取り込んでいった跡をたどる科学論であるが、洋学史・英学史の観点からも読み応えがある。木村一『和英語林集成の研究』（明治書院、2015年2月）は、ヘボンによる『和英語林集成』を、その手稿から初版、再版、3版に至るまでを日本語研究資料と位置付けて、周辺資料をも援用しながら分析したものである。翻訳論の方面で、高橋修『明治の翻訳ディスクリール——坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』（ひつじ書房、2015年2月）は、「翻訳を文化交コミュニケーション通の一つの媒介者とする観点に立ち、むしろ意味の変容とズレに着目し、異文化を受け取る側の問題認識に最大限の焦点をあてながら、明治期の翻訳文学のもつ問題性をテキスト受容論的に問い直すことを目指し」（「はじめに」）、坪内逍遙や内田魯庵などによる翻訳を分析している。中村聡『宣教師たちの東アジア——日本と中国の近代化とプロテスタント伝道書』（勉誠出版、2015年2月）は、漢文で書かれたために日本でも幕末明初に用いられた宣教師によるキリスト教伝道書『天道溯源』ほか、漢訳西洋科

学書『博物新編』・地理書『地球説略』を取り上げて、その内容を紹介し、その意義を分析したうえで日本への影響を論じている。

ほかに、日露間の文化・相互理解に尽くした人々を、幕末明初の人物から現代人に至るまで30名を選び、その略歴、功績をまとめた長塚英雄編『日露異色の群像30——文化・相互理解に尽くした人々』（東洋書店、2014年4月）がある。

### (3) 紀要論文等

紀要論文等については、論文のみについて著者・論題を掲げる。

まず、日本英語教育史学会の『日本英語教育史研究』第29号（2014年5月）は、論文としては東博通「帝大撰科時代の岡倉由三郎」を収めるのみである。撰科生岡倉の履修科目等を調査報告し、岡倉の経歴中充分には明らかになっていなかった部分に光を当てている。ほかに第29回大会でのシンポジウム「英語教育史研究へのフロンティア：研究方法論への提言」での提言要旨、書評などが掲載されている。

日本英学史学会の『英学史研究』第47号（2014年10月）のほうも論文としては、平田論治「『美術使節』としての岡倉由三郎——1930年代初めの『日本』の語りについて」、楠家重敏「幕末駐日イギリス外交官の日本語文書翻訳」の2本である。前者は、岡倉が晩年に渡来し、3ヶ月にわたって日本美術を紹介する講演旅行を行ったその活動の具体相を明らかにするもので、後者は、英国外交官による日本語文書の翻訳を分析し、彼らの日本語読み書き能力がどのように変化、向上したかを考察している。

同学会各支部では、東日本支部の『東日本英学史研究』第14号（2015年3月）が河元由美子「『英米対話捷徑』を読む」ほか2本の論文、「地方の英学」には篠田左多江「清水次郎長の英語塾」等を収載している。関西支部の『関西英学史研究』第8号（2014年9月）は支部創立50周年記念号となっており、支部長加藤詔士「創立50周年記念号に寄せて」の巻頭言に続き、北垣宗治「重久篤太郎と関西支部」の講演録、及び吉村侑久代「川柳を愛した英国人 R. H. Blyth——川柳の翻訳活動を中心に」など3本の論文を収載している。中国・四国支部の『英学史論叢』第17号（通巻37号）（2014年5月）に研究論考はないが、事務局編に係る「日本英学史学会広島支部及び中国・四国支部研究例会の歩み」の記録が貴重である。

『東北学院英学史年報』第36号（2015年3月）には、猪股謙二「長谷川松治先生の言語学と東北学院」、高橋直彦「長谷川松治先生の思い出」などのほか、同学院卒業生5名による特集「英語教育の現場と東北学院での学び」が収められている。

八雲会の『へるん』No. 51（2014年6月）は中川智祝「小泉八雲と服部一三——富山大学での調査と静岡福祉大学での展示を経て」の講演録に続き、風呂鞆「ハーン『むじな』——その魔術的な技法」など長短28本を収める。

他には、昨年度分も含め、川嶋正士「『5文型』成立事情——細江逸記の功罪」『国

## 回顧と展望

際文化表現研究』第10号(2014年3月), 三好彰「改正増補『英和対訳袖珍辞書』の手稿をもとにした編纂方法の考察」『洋学史研究』第31号(2014年4月), 安部規子「修猷館の英語教育——明治時代の試験問題について(1)」『久留米工業高等専門学校紀要』第30巻第1号(2014年9月), 竹中龍範「高橋五郎『最新英語教習法』をめぐる」『言語表現研究』No. 31(2015年2月)があり, 佐藤武義・前田富祺編集代表『日本語大事典(上)』(朝倉書店, 2014年11月)には飛田良文が日本語学研究の視点から「英学」及び「英学資料」をまとめている。

### (4) その他

2015年7月21日, 明治期のものを中心に著作権の切れた出版物について国立国会図書館収蔵資料をデジタル公開していた近代デジタルライブラリーが国立国会図書館デジタルコレクションに統合されるとの予定が発表された。平成14年にサービスが開始されたが, これは平成28(2016)年5月末を以て終了, 移管されるとの予定, URLが <http://kindai.ndl.go.jp/> から <http://dl.ndl.go.jp/> に変更されるので注意されたい。

(香川大学教授)